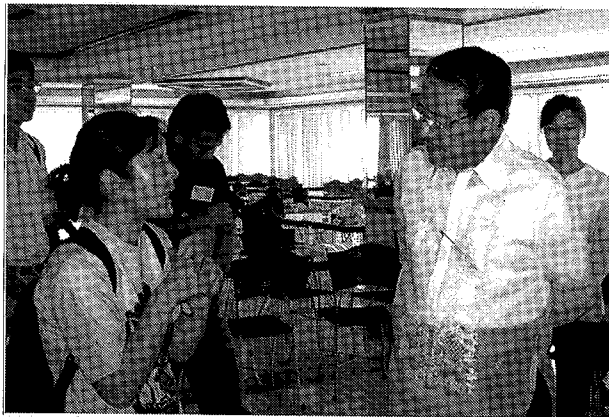


Ⅲ 海外研修



1. 海外研修の成果と総括

磯田 厚子

(1) 海外研修のねらい

今年初めて海外研修を実施した。目的は、国内研修の学びを、より具体的な教訓として明確につかむことである。

そのために、第1に、実施中ではなくすでに終了した案件への訪問インタビューをあえて行わせていただいた。これは、お引き受けくださった CCWA、JICA の両現場の方々には大きなご負担をお掛けしたことと思う。この場を借りて御礼申し上げたい。

第2には、国内研修で得られた「自立発展性を確保するための必要事項」や「どうフェーズアウトするか」などに関する学びを基にして、その具体的なあり方を確認するための質問リストを、事前の宿題・事前研修の内容として作成した。こうして、現場へ行って誰に何を聞いてくるのかを明確にして臨んだ。

また、研修中は、毎晩のようにグループ作業を行い、日中の視察やインタビューのまとめや分析を行った。作業量は大変なもので、かなりきついスケジュールとなったが、現地最終日の JICA 事務所での報告、帰国後の報告でも充実した内容を提示できたと考えている。

(2) 成果

外部者としてプロジェクトからうまくフェーズアウトし、またその成果の自立発展性を確保するために、どんな留意点が必要なのか、具体的にいくつかの学び、すぐにでも使える参考例を得たと言えるだろう。具体的に学んだ教訓は、研修生による報告の成果物を参照いただきたい。大きくまとめると、以下の点が成果として挙げられよう。

①自立発展性の具体的なイメージがつかめた。

国内研修で得た「プロジェクトには終わりがあるべき」との大まかな認識を、具体的なかたちで実際のプロジェクトで見て実感した。見せて頂いた2つの事例とも、必ずしも全ての活動が継続していたわけではなく、途切れたものもあったが、それも含めて、どう手を引くか、その後どう継続していくのかの具体的な姿を知ったことは、大変多くの学びに繋がった。どう継続していけそうなのか、どういう自立を目指すべきなのか、の具体像を得たことは、プロジェクトが目指すべき形の参考例となるに違いない。

参加者アンケートでも同様の反応が出ている。海外研修があったからこそ得られた学びが多いことも指摘されているが、このような「イメージをつかめた」というのはまさしく現場を見せていただいたからこそその成果であると考えている。

②自立発展性確保のために必要な留意事項を具体的に学んだ。

両事例から多くのアイデアを得た。成果物にまとめた通り、それを7

項目として一般化してつかんだ。最も大きな鍵としては、地元の人々のオーナーシップの醸成、それに向けたパートナーとの関係づくりであることを学んだ。とくに CCWA の事例から、パートナーが自主運営できるようになるためには、それを担う人づくり、適正な規模、公正な自己管理システムや運営マニュアル整備などが不可欠であることを学んだ。

JICA 事例でも同様であるが、いきいきと活動を担っている人々と出会った。彼らも当初は「終了」を明確に意識している人々では必ずしもなかった。支援側がマネジメントも含めた人づくりの研修を行い、加えて特に CCWA から、終了を明確に位置付けた計画立案を求められることをきっかけとして、自立を真剣に考えるようになった。切羽詰ったことで、終われないという現実や継続できない失敗をのり越え、それらを教訓とすることに繋がったといえるだろう。

そのためにプロジェクト形成時に、パートナーとの終了時のイメージの共有、達成可能な目標の設定、研修などのインプットを生かして終了につなげる仕組み、が不可欠であることを学んだ。人材育成が大事ということは一般的にも言われるが、ここで得られた学びは、「終了・自立」を活動中に一貫して位置付けて取り組むことを強調するものである。その他、少し広く次を担う人を育成する必要性など、具体的な経験の中から得られたノウハウなど、多くの具体的留意点を得られた。

但し、終了と判断する指標や終われそうもない事業をどう終わらせたら良いのか、などに関しては、十分学べなかったとの声もあった。研修事例はそれなりに自立的に運営されているものであったため、今回はその点をつかむことは出来なかったが、むしろ、そうならないためにはどうしたら良いかの学びを得たと考えている。

③相互理解が一層深まった。

全体の総括でも述べたが、8泊9日、四六時中議論したことは、相互理解を深めた。同じ国際協力に取り組む仲間としての協力する意識も生まれた。考えていたより相互に思いは同じであることに気づいたり、また、NGO、JICA ならではの発想を互いに再確認したりした。研修テーマ以外にも、評価のあり方やアカウンタビリティの考え方など議論は尽きなかった。

(3) 課題

①研修スケジュールにまとめの時間を入れる必要性

研修はとにかくキツかった。毎日の振り返りシートも用意し、振り返りミーティングも予定していたが、それ以前に、まず聞いてきた情報の共有や整理の議論で夜中までかかってしまった。それだけ熱心に取り組んだともいえるが、もう少し余裕が欲しかった。しかし、9日間の全日数を増やすことも現実的ではない。プログラムと議論の進め方をもう少し工夫をするしかないだろう。ある程度やむをえないとはいえ、表敬訪問的な時間はできるだけ最小限としたい。また、せめて2つの事例の間に、半日もまとめの時間を取った方が良かった。

②現地でのブリーフィングの必要性

両事例とも、プロジェクト概要の資料が事前送付され、半日かけてのブリーフィングを受けていた。NGO 事例では、現地でも駐在の方から更に詳細についての説明を受け、また視察中も同行、随時補足説明をされた。これが理解を助けたと参加者からも好評であった。残念ながら JICA 事業の場合は、現地ブリーフィングは受けられなかったが、終了しているプロジェクトであることも原因の一つであろう。今後の改善課題である。

③もう少し早めの事前情報提供を

事前情報は約1週間前に届いたが、量も多かったこともありもう少し早く送付することが望ましい。事前準備が1日しか取れず、その半日は事例説明であるので、訪問計画は半日しか取れないことから、質問案を事前に宿題として課した。これも作業は大変であったろうが、参加者は宿題があつてよかったとの反応であった。その意味でも、訪問先などに関する情報などを早めに出すようにしたい。

④海外研修国の選び方（特に言語）

今回研修場所としてフィリピンを選んだのは、研修事例の提供があつた事もあるが、参加者が英語で直接インタビュー出来る事が大きな要素であつた。地域住民には英語を解さない方も一部いらしたが、おおむねコミュニケーションできた。これが通訳が必要な国、地域であつたら、ここまで成果が挙げられたかどうかは判断が難しい。しかし、そうなると訪問国がかなり限られることとなる。研修目的からすれば必ずしも多彩な国々で実施する必要はないかもしれないが、毎年特定の事務所に負担がかかることは避けたい。研修国をどう選ぶかは今後の検討課題であろう。

終わりにあたり、今回多くの方々のご協力で、大変有意義な研修を行うことが出来たことを、あらためて感謝したい。



以上

CCWA の活動現場にて（フィリピン・パナイ島イロイロ州
前列左から2番目が磯田コースリーダー）